

#02_私が食べさせてあげる！～寧音と望海の食事補助＆恋人囁き～

★…寧音

◆…望海

★「せっかく2人っきりの時間を過ごせると思ったのに～
なんで望海さん、いるのかなあ」

◆「あなたこそ…邪魔しないでほしいのですが？
あと気安く名前を呼ばないでくれます？」

★「別にい～でしょ～。細かい事言つてると、嫌われるよ～？」

◆「なっ…！　この程度で嫌うような人ではありません！」

◆「…ですよね？」

◆「というか、こういうガサツな人の方が、彼は嫌いだと思うのですが」

★「はあ!?　そんなことないし！」

★「ぐぬぬぬぬぬ～！」

◆「ん―――っ！」

★「はあ…何やってんだろ。寧音、お見舞いに来ただけなのに」

◆「…ですね。ここでいがみあっても時間の無駄です。今はそんなことよりも…」

★「ふええつ!?　の、望海さん!?　何やって…！」

◆「何って、恋人同士なのですから、これくらいは普通でしょう？
それともあなたはこういう経験…ないのですか？」

★「全然あるし！　でもでも、そういうことじゃなくって…
お世話をしてどっちが恋人かって決めるのが寧音達の約束でしょ！」

◆ 「こういう風に身体をくっつけて、
リラックスさせるのも十分お世話だと思います？」

◆ 「ふふ、こうして触れていると落ち着きます…」

◆ 「あなたも落ち着きますか？ それともドキドキしちゃいますか？ ふふつ」

◆ 「もっとたくさん触れ合ってもいいですけど…はしたないでしょうか？
でも、あなたにならどこを触れられても、私は構いませんから…
望みがあれば、なんでも言ってくださいね？」

★ 「むう～！ 寧音の前でイチャイチャしやがってえ～！
それならこっちにも考えがあるんだから！」

◆ 「どうぞ、ご勝手に」

★ 「それじゃあ…」

◆ 「何をするかと思えば…あなたも一緒ではないですか」

★ 「ち～が～う～し～！ 寧音がやりたいのは…」

★ 「食事の補助なんだな～」

◆ 「食事？」

★ 「だって、寧音達が来たせいで、ご飯に全然手をつけられていないでしょ？
そもそも事故の後遺症で食べるのも大変そうだし？ 手伝ってあげるのよ」

◆ 「…っ！」

★ 「ね？ あなたもお腹すいてるよね？ 寧音が食べさせてあげるからね～」

◆ 「その手がありましたか…でも、人間食事より性欲です。
くっついている方がきっと嬉しいはず。ですよね…？」

★ 「望海さんって、頭よさそーに見えて…いやいや、今はそんなことよりも！」

★ 「食べさせてあげなくちゃ！ はい、あーん」

◆ 「なっ!？」

★ 「ふふ。ちゃんと食べられたね。偉い偉い♪」
★ 「一口の量はちょうど良さそうかな？
 ふふ、それじゃあどんどん食べようね。
 たくさん食べればその分早く回復するはずだから！」
★ 「はい、あーん」
★ 「どう、おいしい？ でもあれかな？
 病院のご飯ってあんまり味しないって言うし、微妙なのかな？」

◆ 「あなた…すごい慣れていますね。意外と…家庭的？」

★ 「うーん、どうだろう？ でも、妹のお世話をしたりとかしてるからかも。
 あとお料理するのも好きだし！」
★ 「そうそう！ 本当は手作りのお弁当を食べさせてあげたいんだけど…
 それは、退院してからのお楽しみだからね♪ 期待しててね♡」

◆ 「料理が趣味とは…なかなかやりますね。でも、私だって…」

◆ 「うう…」

★ 「何それ、ひつついてるだけじゃん？」

◆ 「あなたは…放っておいてください」

★ 「はーい。わかりました～。寧音だって食べさせてあげたいし」
★ 「それじゃあ次はスープを食べようか…熱くならないように…」
★ 「ふ～…ふ～…ふ～…！」

◆ 「なっ…!？」

★ 「はい、どうぞ～あーん」
★ 「どう？ これなら熱くないでしょう？」

◆ 「なんということでしょうか、息を吹きかけるなんて…
 実質間接キスなのでは？」

★ 「ただ冷ましてるだけなんだけど…というかこれくらい普通でしょ。
だって寧音は彼女さんなんだから」

◆ 「…っ！」

★ 「それじゃあ…もう一口…ふ～…ふ～…ふ～…！　ふ～！」

★ 「えへへ、最後のふ～は、スープが美味しくなるようになって、
おまじないをかけてみちゃった。美味しくなってるといいんだけど…
なんて」

★ 「それじゃ、はい、あ～ん」

★ 「美味しい？　えへへ、それなら良かったよ。
じゃあ、つぎはどうしようかな～」

◆ 「あの…寧音さん」

★ 「はい、なんでしょう」

◆ 「その…できれば私も…その…食事補助のお手伝いがしたいというか…
なんというか…」

★ 「望海さんは、身体をくっつけるのがいいんじゃなかったの？」

◆ 「それは…そうではあるんですが。でも恋したるもの、
こういう日常の身の回りのお世話というのもまた大事かなと思いまして…」

★ 「だから、寧音と交代してほしいのかな？」

◆ 「…はい。恥を忍んでのお願いなのですが…」

★ 「いいよ」

◆ 「やはりいけませんか…え？」

★ 「いいって言ってんじやん」

◆ 「本当に？　いいんですか？」

- ★ 「別に、断る必要もないし？
望海さんもお世話したいって気持ちは一緒なんですよ？」
- ◆ 「それは…まあ…そうなんですが」
- ★ 「それに、同じことをしたほうがどっちか優れてるかとかもわかりやすいし？
それじゃあ、どうぞ。はい、スプーン」
- ◆ 「…私は少しあなたのことを勘違いしていたようですね…
ありがとうございます…」
- ★ 「でも代わりに…今度は寧音がペタペタさせてもらうから」
★ 「ね～？」
- ◆ 「なっ…！」
- ★ 「望海さんは文句言えないでしょう～」
- ◆ 「たしかに…そうですが…！ そうなんですが…！」
- ★ 「えへへ～。やっと抱きつくことができた～」
- ◆ 「うう…」
- ★ 「ふふ、耳真っ赤だよ～。恥ずかしいのかな？」
★ 「でもあなたって、昔からそういう所…あったもんね。気にしないよ。
ふふふつ！」
- ★ 「でもでも…寧音はこういう風にくつつく以上のこと…
いつかあなたとしてみたいなあ」
- ★ 「だって…彼女さんだし。恥ずかしいけど、そういうことには、
当然興味…あるから」
- ◆ 「…寧音さん。あなたも…いえ、でも今はそんなことよりも…」
◆ 「お食事の続き、しましょうか」
- ★ 「なによ～。寧音が話していたのに～」

◆ 「もう十分でしょう？ それに食事が冷めてしましますから」

★ 「それはそうだけどお…」

◆ 「では、ここからは私が…」

★ 「ん？ どうしたの？ 望海さん？」

◆ 「別に…なんでもありません」

◆ 「では、ふーふー…」

◆ 「ど…どうぞ」

◆ 「どうでしょうか？ ああいえ…その…もう1度いきますね」

◆ 「ふーふー…ふー…」

◆ 「どうぞ…」

★ 「望海さん、もう少しゆっくり口の中にいれてあげるといいかもよ？
スプーンが歯に当たったりしたら危ないし」

◆ 「あ…そうですね」

★ 「あとふーふーしてあげる時は、優しくしてあげるといいかも？
飛んじゃうといけないし」

◆ 「そ、そうですね。わかりました。では…ふー～…ふー～…」

◆ 「ど、どうぞ」

★ 「望海さん、こういう時はあーんだよ。
あーん。あなたも、そっちの方が嬉しいよね？」

◆ 「…それは少し、恥ずかしいのですが」

★ 「ベタベタくっつくのは平気なのに、そういうのは苦手なんだ。変なの～」

◆ 「人間、得手不得手というものがあるのです。でも…そうですね」

◆ 「あ～～～ん…」

◆ 「ど、どうでしょうか？」

- ★ 「望海さん、 可愛かったよ。顔真っ赤にして照れちゃってるんだもん」
- ◆ 「な、 別にあなたに聞いたわけでは…！」
- ★ 「寧音が可愛かったって思っただけだもん。ね、 あなたもそう思うよね？」
- ◆ 「聞かないでください！」
- ★ 「ふふつ。自分でどうって聞いたのに、変な望海さん」
- ◆ 「それは、 そうですけどっ！ もう、からかわないでください！」
- ★ 「ふふっ…あはははははっ」
- ◆ 「うふふふふっ！」
- ★ 「なんだか、 恋人同士を取り合う敵だって思ってたけど、
寧音達、案外仲良くできそうだね」
- ◆ 「そうですね。いろいろと…誤解していました」
- ★ 「これからもよろしくね。望海さん」
- ◆ 「ええ。どちらが恋人として選ばれるのかも大事ですが、
彼に1日でも早く元気になってもらうことが何よりも大切ですから。
これからも協力していきましょう」
- ★ 「うん！ ま、でも最後に選ばれるのは寧音だけどね」
- ◆ 「何を言いますか。そこは譲りませんからね」
- ★ 「ふふふふっ」
- ◆ 「うふふふふっ！」